

子ども・農民・村を愛したヒューマニスト

岩田健治

(1897~1961年)



子どもたちの個性を尊重し、自主的・民主的な教育を実践する中で、二・四事件で検挙された。免職後は農村の立て直しに信念をもって尽した。

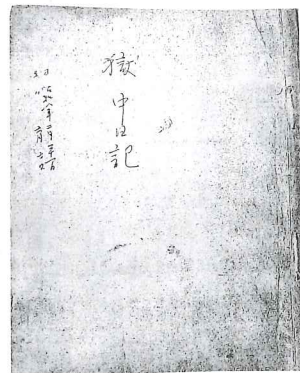
「世の毀誉（そしることとほめること）に恐るゝことなく一日の名誉を捨てゝ永久の名誉を追ふ」（岩田の日記より）

●一〇六日間の獄中生活

岩田健治は、南佐久郡田口村三分（現佐久市田口）の中農自作農の雛太郎とやすの二男として生まれた。一九一八（大正七）年三月、長野県師範学校一部（現信州大学）を卒業。四月に赴任した東筑摩郡岡田村岡田尋常高等小学校（現松本市岡田小）を始め、五校の教壇に立ち、一九三二（昭和七）年三五歳の若さで高瀬尋常高等小学校（現高瀬小）校長に抜擢された。妻かつとの間に敏子、すみ江、英

子、静子の四人の子がいる。この岩田の人生を一変させる事件がおきた。

「二月二十一日火曜日朝、まだ寝ている時に、駐在巡查河原田氏が来宅、『岩田君署に来て戴き度い』とのこと、『任意出頭にして、警察への出頭は今日の午後にしてもらいたい』と告げた。巡查が警察に問い合わせたところ、『任意ではない強制的だ』と叱られたというので、（中略）朝食を急いで済まし、妻に安心せよと言って立つた」（『獄中日記』昭和八年二月二十一日・至同六月六日）表記の一部を現代語訳に改めた。



『獄中日記』

高瀬小校長岩田健治は、この日から釈放となる六月七日までの一〇六日間、岩田田警察署の留置所と長野署に拘留され、学校に顔をみせることなく校長職を解かれた。

●岩田を学校から追放した「二・四事件」

なぜ、現職校長の岩田が検挙のうえ懲戒免職になったのだろう。それは、一九三三（昭和八）年二月四日、治安維持法違反としてあらゆる社会運動の芽を摘み、国民を戦争へと動員する戦時体制作りをめざした「二・四事件」によるものであった。治安維

持法とは、天皇主権体制を維持するために、「国体の変革」や「私有財産制度の否認」という思想の持ち主や行動を取り締まる目的で一九二五年に制定された。一九二八年には最高刑を死刑にした。

齋藤実内閣は、この法律に違反しているとみなした政党や団体の動きを徹底的に弾圧した。対象となつた代表的な団体は、日本労働組合全国協議会（全協）と全国農民組合全国会議（全農全会派）である。この弾圧は、長野県では二月四日から始まった。学校関係では、自由主義教育などを目指した全協下の非合法組織日



『中信毎日新聞』昭和八年九月十六日

本一般使用人組合教育労働部（教労）や合法組織の新興教育同盟準備会（新教）にかかわつ

ているとみなされた小学校六二校、実科中学校四校の教員たちで、総勢一三〇人におよんだ。北佐久郡下では、高瀬小の岩田をはじめ岩田尋常高等小学校（現岩田小）五人、平根尋常高等小学校（現平根小）一人が検挙された。県下で唯一人現職校長である岩田が拘束された衝撃は大きかった。

●自由主義教育からプロレタリア教育へ

岩田は、三月二日の『獄中日記』に「一体俺等

のしたことが何が悪いと言つた。全くわけがわからぬ。（中略）文化運動―教育革新運動―その何所が悪いのだ。世の進歩と共に歩み、世の文化と共に進まんとする所に教育の意義がある。進歩のない所、発展のない所に若き生命の教育が置かれるか。おお、時代は恐ろしい反動だ」と書きしるした。

大正五、六年ごろから長野県師範附属を中心に、教員の行動を束縛せず、子どもたちの個性や能力に応じて学習活動をするという「長野独自の自由教育」が広がった。岩田の教育観はこの中で育まれ（『新教の友』第5号）、一九三三（大正12）年には「自分は社会主義思想の円満な発達と社会が革新されることを望み、冷酷な圧迫と迫害を加えるものに対して、強い反抗心を禁じ得ない」と記すようになる。（『岩田日記』）

④児童の学校内組織をつくり、その運営を自主的に民主的なものにする。

こうした研究会や地域と共に歩み、子どもたちの自主的・民主的な教育活動をしてきた岩田を、新教・教労の運動に結びつけたのは、上田市立尋常高等小学校（現上田市清明小）代用教員で教労上小地区責任者河村卓であった。岩田は、一九三二年七月七日結成された教労佐久地区の責任者となり、活動を効果的に発展させるためには、非合法の教労活動よりは合法の新教活動をと主張した。それにもかかわらず特別高等警察（特高）は、治安維持法違反として検挙した。この二・四事件を契機に、長野県は、国策への協力を強め、満蒙開拓青少年義勇軍を全国で一番多く送り出す県となった。

●新たな門出―農民・農村と共に―

免職後岩田は、不当に拘束された青年教員の一日も早い復職を内務省に申し述べるため上京したが、新しい道を求め悩んだ。手をさしのべた友人の北原龍雄から「農村小学校の教員は、農村を思索する人でなければならぬ」と勧められ、一九二〇年代から国内外の農業・農村論を読破し研究してきた成果を『村の経済六十年史』として、一九三四（昭和9）年に実益農業社から刊行した。

近代日本の農村経済は、どのような歩みの中で「何が村の経済を奪ひつゝあるか」「育ちつゝあるの



『村の経済六十年史』

か」「産まれつゝあるのか」など、全国の経済の動きと関連しながら、田口村の経済

がなぜ行き詰まったかを解明しようとした力作である。出版の願いは、自作農以下の農民によって農村を立て直すことにあった。その思いをもって一九四六（昭和21）年、南佐久農民組合連合会や田口村農民組合を仲間とともに設立し、組合長として活動した。戦後は、日本共産党に入党し、一九四七年四月の第一回の衆議院議員総選挙では日本共産党公認で立候補、翌年の参議院議員選挙にも立候補し、志を遂げようとした。子どもや農民を愛し続けた岩田は、一九六一年三月二日に胃がんで亡くなった。（小平千文）

○参考文献

- 岩田健治著『村の経済六十年史』実益農業社 一九三四
- 二・四事件記録刊行委員会編『抵抗の歴史 戦時下長野県における教育労働者の闘い』労働旬報社 一九六九
- 青木孝寿「岩田健治」
- （信濃毎日新聞社編集局編『信州の教師像』一九七〇）
- 南佐久農民運動史刊行会『南佐久農民運動史』
- （戦前編・戦後編）一九八三・一九九〇